

# 翻訳という世界



船越 隆子

翻訳家

国BBCの作成した映像を東京の自宅(当時)へ持ち帰り、ナレーション部分を私が、裁判自体のイタリア語のやりとりを別の翻訳者が担当した。

昨日、音楽配信サイトから携帯電話にメールが来た。初めて開いてみたら、新曲の着メロ情報だけでなく、昔のヒット曲も取り出せることを発見。年ごとのベストテンも分かるようになっていて、懐かしい曲が並んでいた。

それでふと思つた。いたってのんきにやってきたとはいえ、翻訳歴25年ともなれば、実にさまざまな仕事をさせてもらってきた。その中のベストテンは？

でも、記憶に残る仕事は10件ではすまないし、出来のいい作品といつても自分では判断できない。そこで、「仰天」とまではいかないかもしれないが、面白かったエピソードをいくつか挙げてみたい。

まずは、映像翻訳部門。

NHKの海外ドキュメンタリー番組ではシリアスなものが多かった。例えば「マフィークで楽しいものが多かった。ア大裁判」(1988年放

映)は、イタリアで行われた実際の裁判を映したものだ。「花壇を作りましょう」と言

なにせマフィアのボスの裁判だから、法廷に権をしらえて、被告人を中に入れたまま裁判を行うという緊迫した状況。また駆け出したところ、NHKコールドンタイムの90分番組を任された緊張感は今も忘れられない。

また、こんなこともあった。米軍の戦略をテーマにした放送番組(1990年ごろ放映)を、米国で放送されたから24時間以内(日本のテレビでも放送することに。到底一人の翻訳者では間に合わない)で、番組の10分ずつを分拍することになった。正午過ぎにビデオテープと原文がバイク便で自宅に到着。それをすぐに翻訳して台本を作り、当時はまだメールがなかったので、午後4時ごろには急いで電車で飛び乗り、番組制作プロダクションまで駆け

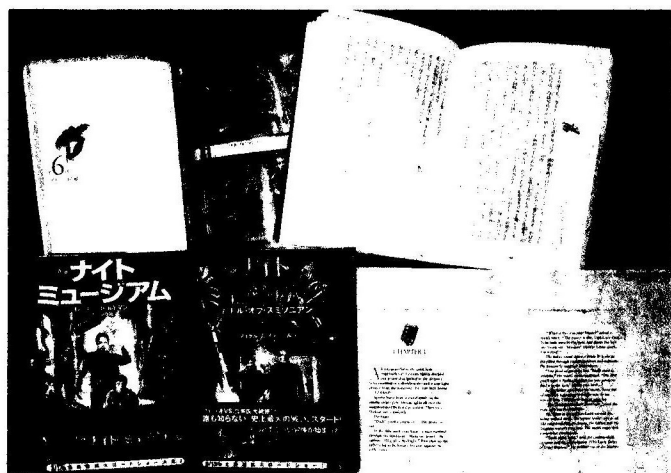
いた。

NHK衛星放送の教養番組「エンジョイ・ライフ」シリーズ(1993〜2005年ごろ放映)は、一転してユニークで楽しいものが多かった。

米国制作の園芸番組では「花壇を作りましょう」と言

## 仕事ベストテン? 緊張感と楽しさと

<11>



船越さんが翻訳した映画「ナイトミュージアム」のノベライズ版と英語の原書

っても日本で考える摩とはスケールが違う。その違いを染しめて、かつ日本での庭造りの参考になるよう、フィートの寸法をメートルで示すなど工夫したりした。

同じ「エンジョイ・ライフ」シリーズで放送された英国BBC制作の料理番組(1998年放映)では、ふくよかな婦人2人が英国各地をめぐる、行った先々の食材を使って料理をする。邦題は「グルメおばさんイギリスを行く」だったが、原題は「TWO FAT LADIES」(2人のふとっちょおばさん)で、日本ではまずあり得ないタイトル。爽快なおばちゃんたちはヘルメットにサングラス姿で、サイドカーを取り付けたバイクをすっ飛ばし

て旅をする。真っ赤なミニユアを塗った指でひき肉をこねるといふのも、日本の料理の参考になるよう、フィート

出版翻訳では、映画「ナイトミュージアム」のノベライズ版(2007年出版)を翻訳させてもらった時のこと。

映画がそのまま小説になっていて、訳す前に映画も見えておきたかったが、日本ではまだ公開前。東京で催された試写会にも徳島からはなかなか行けず、代わりに担当の編集者に見てきてもらうことになった。その報告を受けて訳すことができ、後で公開された映画を見て、場面に大きな間違

いかなかったことにほっとした。

資料や参考文献の翻訳では、ポーンスカウトやスポーツの資料から、シンガポールの義務教育、狂牛病やテロ犯罪に対する法律、国連難民高等弁務官事務所の緊急対処法などまで、硬軟取り混ぜて多岐にわたる。

中でも珍しかったのは、「刀の罫」を英語で詳しく説明した文献の和訳(2007年)。ドイツ人コレクターが作成したものでしたが、やら詳しく、こちらも事典やネットで専門語を調べなければ訳せないほどだった。

最近の仕事では、小説「ブレイキング・ポイント」(2010年出版)が記憶に残る。解釈しづらい英語で作業がさっぱり進まず、本当に一冊全部訳せるだろうかと思信をなくしかけたところに、知人が「まるで散文詩のような英語ね」と言ってくれた。それなら分りにくくても仕方ない、と聞き直して訳に取り組みことができた。

ベストテンまでは紹介しきれなかったが、驚いたこと、困ったこと、面白かったことはこれ以外にもたくさんある。縁あってせっかくならえたい仕事の二つ一つに、自分なりに一生懸命に向き合ってきたかな、と思いつくと、反省点もまたたくさんあることにも気づかされる。

(徳島市在住)

## 番組や本の雰囲気生かす